



Title	哲学な対話のかたち : ある日の哲学カフェから
Author(s)	鈴木, 径一郎
Citation	臨床哲学のメチエ. 2013, 20, p. 33-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24942
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

哲学な対話のかたち、一例

—ある日の哲学カフェから

鈴木徑一郎

久しぶりに哲学カフェに行ってきた。2012年9月12日、場所は中之島のアートエリアB1（注1）。テーマは「話が長いとは?」。ここ数年、個人的にも気になっていたテーマだ。

話が長いとはどういうことか。... ということだろう? 時間の長さを言うなら、私は自分の話の長さを数値で見せられたことがある。6、7年ほど前、大阪大学コミュニケーションデザインセンターの討議型の授業に参加したときだった。グループディスカッションの際、各人の発言時間が記録されるのだが、そこでグループ1位を獲得してしまったのだ（注2）。

しかし、自分の話は置いておこう。今回の哲学カフェは私が予想しなかった方向に面白かったのだから。

何が面白かったか。ひとくちに言うのは難しい。が、それは議論の内容というより、むしろ参加者の議論の仕方由来するものだったとおもう。参加者は皆（注3）、「話が長いとは?」というテーマに意識させられたのか、できるだけ短く、コンパクトにしゃべろうとしているようだった。私は他の回のカフェには参加できていないが、継続して見ているスタッフからしても、いつもよりコンパクトであったよう

だ。数字で見ても、2時間という短い時間に7、80程度の発言があった（注4）。

そして、これは進行の仕方に関係しているのだろうが、個々の論点に関しては議論があまり深まらない印象があったものの、論点、視点は数多く提出された。

結果、これはこれで魅力ある、楽しめる会だった。議論はあまり進んでいないようにも見える、しかし、発言数の多く、論点のたくさん出る哲学カフェ。これはこれでひとつの哲学な対話のかたちだ。そうおもった。



当日の様子を少しだけ振り返っておこう。

参加者は30人くらいだっただろう。定員は「50名程度」という案内だったが、こじんまりとしたスペースに、満員のようにも見えた。継続して実施しているだけあって、常連さんもいるようだった。

会場の壁にはスライドが投影されていて、ひとつの極をつくっており、そちらに向かって背もたれつきの椅子がゆるやかな同心円を描くように置かれていた（注5）。進行役は、スライドの前、視線の集まる方向に立つ（注6）。一方

で、会場の周辺部分には背もたれのない柔らかい椅子も置かれていて、その「極」をちょっと斜に見るような感じで座ることもできる。背もたれつきの椅子のいくつかは会場から通路にはみ出してあり（注7）、それも堅苦しくなくて良かった。「入退場自由」という案内は建前ではないのだな（注8）、と感じた。

議論は進行役がテーマについて説明するところから始まった。おおまかに次のようなことだった：人の話が長いと感じることがある、しかし、同じような話でも、たとえば話す人が変われば短く感じたりもする、話が長いとはどういうことか。

つづいて、議論のルールについて簡単な説明があった：マイクを受け取ってから話すること、話は最後まで聞くこと、手短かに話すこと。以上の3点は、ここでの哲学カフェのいつものルールということだが、今回は「テーマがテーマ」ということで、もうひとつ追加のルールがあった：「話が長い」等のヤジは控えること。

そして、「私の話は長いという自覚のある人」に議論の口火をと進行役が振ると、すぐに手が挙がった。その人は「自分でも話が長いと思うし、人からもそう言われる」とのことだった。確かに話が長そうだな、しゃべり始めてすぐにそう感じた。しかし、発言は思いのほか短く終わって、そのあと最後まで、飛び抜けて長くしゃべると

いう人はいなかった（注9）。



議論の手前には、何について議論するか、という問題がある。そして、それも議論される問題になりうる。今回の哲学カフェのように事前にテーマの用意されている場であっても、そのテーマのうちで、あるいは前提となるようなところで、集中して議論したい論点というのは参加者によって異なり、何を議論するのか、どういう角度から議論するのか、ということ自体が、意識的なかたちで、あるいはあまり表立たないかたちで議論になる。

論点の絞り込まれたテーマを用意したり、進行役がある程度誘導すれば個々の論点を深めることもできるかもしれない。

しかし、今回について言えば、進行役は最初に話を振って以降、発言が不完全なときに質問をして言葉をひきだす程度で、積極的な議論のコントロールはしなかった。議論の方向付け、フォーカスについては参加者に託されていた。そして、議論の方向についての参加者による発言は少なかったわけではないが、それによって議論の中心がどこかに決まる、ということにはなかった。発言者は、それまでの発言をまったく無視するわけではないにしても、やはり自分の関心にもとづいてだろう、視点や論点を変えたり、ずらしたりすることが多かった。

いわゆる「深い議論」、たとえば推

論に推論を重ねるような議論を対話的に進めていくためには、たとえ仮にでも、対話者の間で議論のスタート地点を固める必要がある。そして、対話の参加者が多い場合には、共通のスタート地点を見つけること、つくることは容易ではない。だからといってスタート地点が十分に共有されないまま一方的に話を進めれば、聴き手はついていくことができない。また、たとえ一步一步丁寧に議論がなされても、誰もが同じ問いに関心を抱けるわけではない(注10)。今回は、「ついてきている」人(注11)が多い会だったのではないだろうか。ついてきているものにも、スタート地点を定めようと、テーマの周りをウロウロしているだけだったと言われるかもしれないが。

注

(1) 京阪電車なにわ橋駅地下1階コンコース内にある、なにか色々なことをやっている場所。2008年10月のオープン以来、哲学カフェに限らず参加型の対話イベントの類も、継続的に実施されている。

(2) もうひとつのグループをあわせても1位だったかもしれない。

(3) 筆者を含む。

(4) 進行役の発言をのぞく。

(5) いわゆるシアター的な配置。

(6) 哲学カフェで、視線を意識した場の作り方というのは大事な問題だともう。車座にすれば対等な位置関係で参加できていいような気(もするが、逆にさぼりにくかったりもする。

明確に極があって、視線から逃れ易かったり、関心の濃淡で場所や姿勢を変えられるのも悪くない。

(7) もしかしたら、あれもスペース内だったのかもしれない。アートエリアB1は駅コンコース内にあるのだが、駅通路との境い目がいまいちよく分からなかった。

(8) 主催者がそう思っている、人退場しにくい空間で出るに出られない、ということはまあある。

(9) そしてヤジも無かった。ここでの哲学カフェはヤジが出ることも少なくない聞いていたのだが。発言者と発言の仕方(発言内容でなく)に対してのやや挑発的な批判も、途中、無かったわけではないのだが、それもひとつの意見として議論の枠の内で行われたものになっていったように見えた。これも面白い問題ではある(今回のカフェのテーマが自己反省的なものであるということもある程度絡んでいるとおもう)が、割愛する。

(10) そういう意味では、「議論したい論点」云々の前に、「議論できる論点」という問題があるとも言えるかもしれない。

(11) 筆者を含む。

◇すずき けいいちろう

大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室博士後期課程。大阪大学産学連携本部イノベーション部特任研究員。臨床哲学研究室では、パブリック・エンゲージメントに関する活動を行うとともに、日々の生の中の「詩情」というテーマに取り組んでいる。演劇演出家としても活動している。